

問題構成

国語力には、読解力や想像力、表現力など様々あると思いますが、それをもう少し分かりやすく言うならば、それはすなわち、筆者の考えや登場人物の心情を正しく理解し、身の回りのことや社会に置き換えて考え、自分なりの意見や感想を持ち、それを相手にしっかり伝わるよう上手に表現するという力でしょう。本校の入試問題は、そうした力をバランスよく見ることを意図しており、問題形式についても様々です。言葉や表現の意味、接続詞や指示語、登場人物の心情や内容理解、また、ちがいや理由の説明、漢字の読み書き等、色々な形式の問題をとり交ぜて出題しています。そうしてそれらを通じて、文章を論理的に読解する力や登場人物の心情を正しく読み取る力、想像し思考する力、自分の言葉で正確に表現する力、そして言葉の知識や漢字の読み書きなど、国語で必要とされる様々な力を幅広く見えています。

本校が例年、国語で出題する文章は、説明的文章が一編と、文学的文章が一編です。また、ここ数年は漢字を独立問題として出題することが多く、合計3題となっています。入試本文については、今の子ども達にぜひ読んでもらいたい、考えてもらいたいと思う読み応えのある文章を選ぶよう心がけていますので、過去問題などに取り組んだ際に興味を持った文章があれば、ぜひ本を手にとって豊かな読書経験につなげてほしいと願っています。

記述問題については、20～50字程度の短いものが数題と、70～100字程度の長い記述が1題という形を、例年取っています。長い記述問題は、本文の内容を要約するものもあれば、受験生自身の体験を想像も含めて、本文の内容と関わらせて書くものもあります。さらに、本文を踏まえて現代社会のあり様や自分のあり方にまで考えを広げる、思考力を問うような記述問題を出題する可能性もあります。

尚、入試本文については**2019年度入試第三回**□のように、随筆を出題することもあります。随筆は説明的文章、文学的文章両方の要素があるため、その文章の特徴に応じて出題されています。

文学的文章の出題の意図

文学的文章の読解の中心は登場人物の心情の変化にあります。登場人物の内面は、その表情や態度はもちろんのこと、周りの情景描写にも反映されていることが少なくありません。また、たとえを用いて心情を語ることもあります。つまり登場人物の言動や情景描写、それを表す比喩表現など、文中にある様々な手がかりをもとに、主人公の心情がどう変化したのかを読み解いていくことが大切です。文学的文章を読む際には、ただストーリーをたどるのではなく、登場人物の表情や仕草、態度、周囲の情景描写など一つひとつの表現にじっくり向き合いながら読むとよいでしょう。

情景描写を用いて心情を語る例としては**2020年度入試第三回**□の問二、登場人物の態度から心情を読み取る例としては、**2020年度入試第一回**□の問三や問四、問十などが挙げられます。

説明的文章の出題の意図

説明的文章の読解の中心は、文章の組み立てに気をつけながら読み、筆者の言いたいことをつかむということです。説明的文章というと難しい印象があるかもしれませんが、筆者の言いたいことは基本的に1つです。その1つのことについて手を変え品を変えて説明しているだけです。筆者

の主張の流れを考えながら読んでいきましょう。説明的文章を読み解く際には、具体と抽象、対比関係、くり返し表現、原因と結果などいくつか意識すべきポイントがあります。それらのポイントに気をつけながら、文章の組み立てを考えていくとよいでしょう。また、文章の要点を把握するための語彙力があるかどうかを問うようになっています。

対比的な述べ方の理解を問う例としては、**2018年度入試第一回** ㉓の**問五**、原因と結果の関係を問う例としては、**2018年度入試第一回** ㉒の**問六**や ㉔の**問八**などが挙げられます。

漢字の出題の意図

小学校での学習の範囲から出題しますが、日常会話の中で用いるような言葉だけでなく、様々な文章を読みこなし、考察するための語彙を持っているかどうか、言葉の知識を問うものでもあることも本校の意図するところです。漢字や語句問題なども結局は語彙、つまり言葉の知識と結びついています。目や耳から入ってくる情報で、意味のはっきりしない言葉に出会ったら、分からないままにせず、調べる習慣をつけましょう。普段から言葉を意識して生活してほしいと思います。

例えば**2020年度入試第一回**の「参画」、**第二回**の「枚挙」、**第三回**の「雨垂れ」などは、小学生の会話の中にはなかなか出てきませんが、上記の意図のもとに出題しています。